

第24回 文学館演習 —日本近代文学資料の探索と処理—

2022年度 講義概要

2022年8月23日(火)～8月27日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

中島国彦（館理事長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

紅野謙介（日本大学特任教授）

文学館の歴史をふりかえるとともに、所蔵資料はどのように集められたのか、その成り立ちと構成について解説する。夏目漱石や森鷗外など、個々の作家の原稿や初版本はむろんだが、そうした優れた才能の出現だけで「文学」が生み出されるわけではない。有名無名、さまざまな書き手が現れ、多くの出版物が刊行され、たくさんの読者が登場して、初めて「文学」の生産と享受のサイクルが回り出した。雑誌や叢書、さまざまな読者や愛好家、研究者のコレクションなど、「文学の生態系」を紹介していく。

2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料（書簡・ノート） 安藤宏（東京大学教授）

近代文学の資料は「活字」になったものとならなかったものとの間に決定的な性格の違いがある。書簡、日記、メモ、ノートなど、「活字」にはならなかった直筆資料と、実際に世に問われた作品との関係をどのように論じるか、というのは研究の大きな課題で、自覚的な方法意識が求められる。作者の直筆資料を調査、研究する方法について、館に収蔵されている太宰治の資料を中心に、わかりやすく解説したい。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 図書 須田喜代次（大妻女子大学名誉教授）

近年はインターネット上での配信という例も出てきましたが、基本的に文学作品は、新聞・雑誌・図書といった〈容れもの〉に入れられて、読者の元に届けられます。作品はそうした〈容れもの〉と無関係に存在するわけではありません。今回は、そのうち図書という〈容れもの〉について考えてみたいと思います。具体的には森鷗外『即興詩人』を素材とします。

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌 宗像和重（早稲田大学教授）

近代文学の作品は、一般に、雑誌や新聞などに発表され（初出）、著者の推敲を経て、あらためて単行本として刊行される（初版・初刊）。その間に、本文の異同が生じることも少なくないが、こうした原稿から初出、そして著書へという本文の位置づけを、どう考えればよいだろうか。また、雑誌は単に作品発表の場であるだけでなく、明治期の『早稲田文学』や『文章世界』が自然主義の牙城となったように、その性格や編集方針、あるいは編集者が作品と密接に関わることも多い。文字通り、「雑誌の宝庫」である日本近代文学館の資料を中心として、こうした雑誌と近代文学との関わりを考えてみたい。

④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞 山田俊治（横浜市立大学名誉教授）

近代社会に固有の文学形式である小説は、どのように成立したのであるか。その成立に当たり、近代社会の主要なマスメディアであった新聞が果たした役割は、無視することができない。新聞が小説を復活させる原動力となり、新たな出版形態と結びついて流行現象となったのである。そうした過程を、文学館所蔵の草双紙類を具体的に参照しながら、『小説神髓』によって小説が言語芸術となるまでの時代について考えてみようと思う。

資料の

声を聞く—

2017年 開館50年

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO

153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

(駒場公園内)

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>



図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。(スリッパ持参ください)

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館の挿絵・写真資料は出版物やテレビ番組などで広く利用されています。その整理・保存方法について、写真利用カードを作りながら学んでみましょう。

肉筆資料の解説（実習）

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

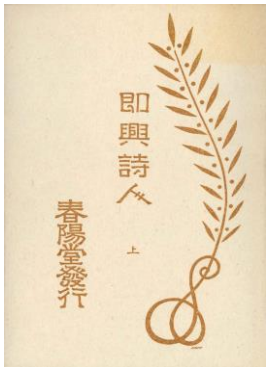
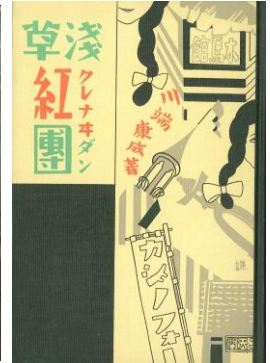
3. 文学をめぐる問題

①海外における日本文学の研究（講義・演習）
 和田博文（東京女子大学教授）

海外の研究者との国際的共同研究は、ここ20年ほどの間に活性化してきた。21世紀初頭からのヨーロッパや東アジアの研究者との共同研究に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。東京女子大学比較文化研究所と上海外国語大学日本研究センターの研究所協定と国際共同研究についても紹介する。

②文学と大衆（講義・演習）
 宮内淳子（近代文学研究者）

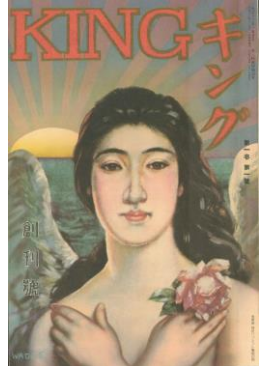
「大衆」が示す意味は広い。ここでは1920年代と1950年代の2つの時期に絞り「大衆」と文学との結びつきを、本館に収蔵された書籍や雑誌を紹介しながら考えたい。1920年代は教育の普及や出版事業の拡大等による読者層の広がりが、雑誌や全集の刊行となって表れた。戦後になるとマスコミの拡大と視覚文化の隆盛のもと、「大衆」は受け手にとどまらず発信者となり、活字メディアのあり方も変えていく。1950年代ではその変化を、サークル誌の紹介や、雑誌メディアと文壇の関わり等から見ていく。



4. 文学の周辺(1)

①文学と映画（講義・演習）
 十重田裕一（早稲田大学教授）

日本において文学と映画がどのように遭遇したかを、1920年代に焦点をあてて考えてみたい。1920年代日本では、さまざまな芸術間の交流が顕著にみられるようになり、新しい表現の可能性を模索する状況を呈していた。なかでも、文学と映画の交流はとりわけ盛んに行われ、モダニズムの作家を中心に、映画の表現を意識した新しい小説の実験が試みられていた。その実験の一端を、同時代の具体的な映画を紹介しつつ検討する。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）
 紅野謙介（日本大学特任教授）

中里介山は最初に『大菩薩峠』を刊行するときには、自分で印刷して少数の私家版とした。なぜ、みずから印刷するという手立てにしたのだろうか。やがて評判になっていくと、新興の出版社である春秋社に委ねた。春秋社は次々と版を変えて刊行をつけ、『大菩薩峠』はベストセラーになっていく。作家の意向と出版社の戦略はどのように交差したのか。介山がべつ小説『夢殿』で受けた検閲の痕跡をたどりながら、出版と文学の関係を追いかける。



5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

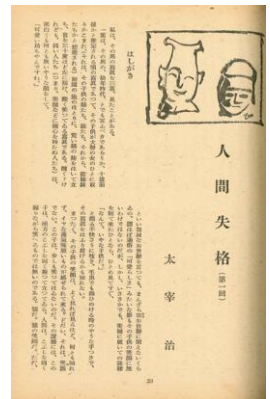
②資料の公開・展示／図録（実習）

文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。

6. 文学の周辺(2)

①書画と文学（講義・演習）
 伊藤一郎（東海大学名誉教授）

本授業では、文学と絵画との関係について、二つの角度から論じる予定である。一つは、言語芸術である文学と視覚芸術である絵画との表現の違いを、絵画から刺激を受けて書かれた芥川龍之介の小説「枯野抄」「秋山図」などを例に論じる。次に、文学と絵画が融合した東洋的表現について、近代小説家における近世文人趣味の系譜という観点から、おもに芥川自筆の書道・俳画を例にして論じる。



②文学と美術・音楽（講義・演習）
 中島国彦（館理事長）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、森鷗外を取り上げ、文学作品が美術や音楽とどう絡まるのかを考えていきたい。鷗外が親しんだ西洋芸術（絵画や音楽など）や日本の伝統芸術を跡付けることは、この問題を考える格好の材料となっている。実際の美術作品の画像や関連音源を利用しながら説明し、あわせて、同時代の芸術家とのつながり、芸術環境についても紹介したい。